

《書評》

「変容の秘密」をめぐるミステリのアンソロジー：
『変容する都市のゆくえ：複眼の都市論』

三浦倫平*・武岡暢**編著、文遊社、2020年

饗庭伸†

昨年（2020年）からのおこもり生活で、いろいろな通信販売に手を出してしまった。届くまでの時間をわくわくしながら過ごすことができるのは、「～の魅力詰め合わせ便」「生産者おまかせセット」のような、生産者、卸・小売業者のなんらかの編集の意図が込められたものである。おこもり生活の真っ只中に届けられた本書は、「都市のゆくえ 詰め合わせ便」のようなものであり、粒揃いの作品を一つずつ味わうように読んでいった。

実は蓋を開けた時に、最初は少し戸惑った。一つ一つの論考の主題、アプローチ、表現の形式が異なり、フレンチのあとに和食を食べ、そして山の中で精進料理を食べているような気分になる。インタビューや座談も、美味しい料理が次々と出てきて、それを食べているうちにラストオーダーの呼びかけとともに終わってしまう飲み会のようなのである。しかし、評者はこれを、都市の変容をめぐるミステリ小説のアンソロジーと思って読んでいった。コザ、埼玉、歌舞伎町、下北沢、向島、多摩ニュータウン……と様々な都市を舞台として、それぞれの変容の秘密が、手の込んだトリックで解き明かされる。都市の変容を楽しむだけでなく、そのトリックも楽しむべき、ということなのだろう。

では肝心のトリックをネタバレにならないように気をつけて一つずつ見ていくことにしよう。

「コザの無意識」は、都市の中心部の「通り」の一方通行を解除する、という都市計画の小さな事件をきっかけに、計画の当事者ですら忘れてしまっている、「通り」に対する計画の文脈を掘り下げていったものである。あちこちで、都市計画がこっそりと、大した考えもなしに変えられることが多くあるが、本稿はその変容に対する一つの誠実な態度を示すものである。

隠された空間的な文脈を現前させることはこの手のミステリの王道であるが、「さいたま：大地の『め』」は、その文脈をどの深さまで掘り下げ、手ごろなミステリとして現前できるのかに挑戦したものである。大地を「わたし」と言い換えるトリッキーな技法によって魅力的なミステリが仕上げられ、最後には劇中劇さながら、ミステリのつくりかたも明らかにされる。

目にうつるものを手がかりとして、目に見えないものをどう認識すべきなのか。「歌舞伎町を歩く

* 横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授

** 立命館大学産業社会学部准教授

† 東京都立大学都市環境科学研究科教授

aib@tmu.ac.jp

© 立命館大学アジア・日本研究所

『立命館アジア・日本研究学術年報』2021, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.2, pp.110-111.

とはどのようなことか」は、変容の果てともいえる歌舞伎町を舞台に、看板というモノと、目に見えない体感や体験の関係を解き明かしていく。ホストクラブという「貨幣で計測される距離」が異常に進化した空間と看板との関係はスリリングであり、貨幣の偏在が際立ちつつある現代都市の秘密を解き明かすヒントになると感じた。

「公共空間をめぐる都市社会運動の可能性と課題」は、下北沢の開発反対運動の顛末を分析した、希望に満ちたミステリである。ある都市計画の事件が起きることによって、多様性というぼんやりしたものが具体的な主体として形づくられ、そこから始まった群像劇が描かれる。群像劇には疾走感がつきものであり、続編を期待したい。

鼎談では、異なる専門家のミステリのつくりかたが惜しみなく披露される。それぞれの方法は交わりそうでもあるが際どいところで平行し、そのことが本書の構造をよくあらわしている。

「振り返りながら、進んでいく」は、「ノスタルジックな下町」という単純な言葉では語れない東京下町の変容を、住民の語りを中心に描き出すものである。木造住宅密集市街地の再整備や東京スカイツリーという大小の都市計画の事件に攪乱されつつも、群像劇の主演にすらならない普通のひとたちの戦略の集合として都市の変容が描き出される。

「多摩ニュータウンの五十年を振り返る」は、都市計画の戦後最大の完全犯罪をやり遂げた犯人の一人語りとして読んだ。都市をゼロから作るという神をも恐れぬ行為に手を染めた動機とその方法、都市のあちこちに巧妙に巡らされたトリックが明らかにされ、読み進めるうちに、現在もまだ完全犯罪が進行中である、という事実に気づかされる。

『『村の記録』のなかの都市』には、都市が出てこない。農村への都市的なものの介入、あるいは都市への農村的なものの介入が、1970年代のNHKの映像作品を通じて丁寧に明らかにされ、そこに大きな犯意なき犯罪があることを暗示してミステリは閉じられる。いわば犯人も、犯罪も示されない斬新なミステリであるが、読後にもたらされた余韻は一級品である。

最後に、このアンソロジーが編まれた必然性について考えておこう。著者を見ると1969年から84年生まれまでの、バブル経済が崩壊したあとに都市に放り出された世代である。バブル経済期の開発は単純であり、戦後に急いで作られた都市に「豊かさ」というストーリーをつけて再開発しているというものであった。80年代に多く語られた都市論は、そのストーリーをちょっと面白いものにする大文字のミステリとして消費されてしまった。そのままゆけば、ミステリ界はもっと単純な構造を持って発達していったのだろうが、結果的にバブル経済は崩壊し、皆で大文字のミステリを楽しむ、という余裕が失われてしまった。そしてかわって切実に求められたのが、都市のそれぞれの場所で、様々なサイズで起きる、急速な成長、ゆっくりとした成長、非成長、縮退……といった開発に対して、力を合わせたり、疑ったり、同調したり、反対したりするときの手がかりとなる、様々な小文字のミステリなのである。松田法子が本書で「風景の変容は、あくまで主体の認識のなかにある。それは、わたくしが、あなたが、土地そのものやあるいはその変容から何を考えたいのか、という問いにほかならない」（103頁）と述べるように、ポストバブル経済期の都市は、あらゆる場所で、それぞれの人たちに、「生き延びるために、主体的に都市を定義し、その使い方を考えなさい」と突き付ける。本書は、ポストバブル世代による、その回答集なのである。